

発掘された松本 2020

～松本市遺跡発掘報告会～

次 第

令和 2 年発掘調査の概要	2 ページ
担当 文化財課 課長補佐 三村 竜一	
 報告その 1 4 6 年ぶりに 3 世紀のまつもとの王墓の墳丘を探る… 6	
(史跡弘法山古墳第 2 次発掘調査)	
担当 文化財課 小山 奈津実	
 報告その 2 大形住居から見つかった謎の大石	11
(堀の内遺跡第 5 次・兎川寺遺跡第 2 次発掘調査)	
担当 文化財課 壬生 量子	
 報告その 3 修理を繰り返し、大切に使われ続けた「水の道」… 18	
(松本城三の丸跡土居尻第 1 3 次発掘調査)	
担当 文化財課 原田 健司	
 報告その 4 古墳時代の集落跡を発見！	24
(県町遺跡第 2 1 次発掘調査)	
担当 文化財課 澤柳 秀利	

「発掘された松本 2020～松本市遺跡発掘報告会～」は、令和 3 年 2 月 13 日に M ウイング 6 階大ホールで開催を予定しておりましたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、会場での開催を取り止め、YouTube での動画配信と、データ・冊子による資料配布に変更しました。

令和2年の調査地点



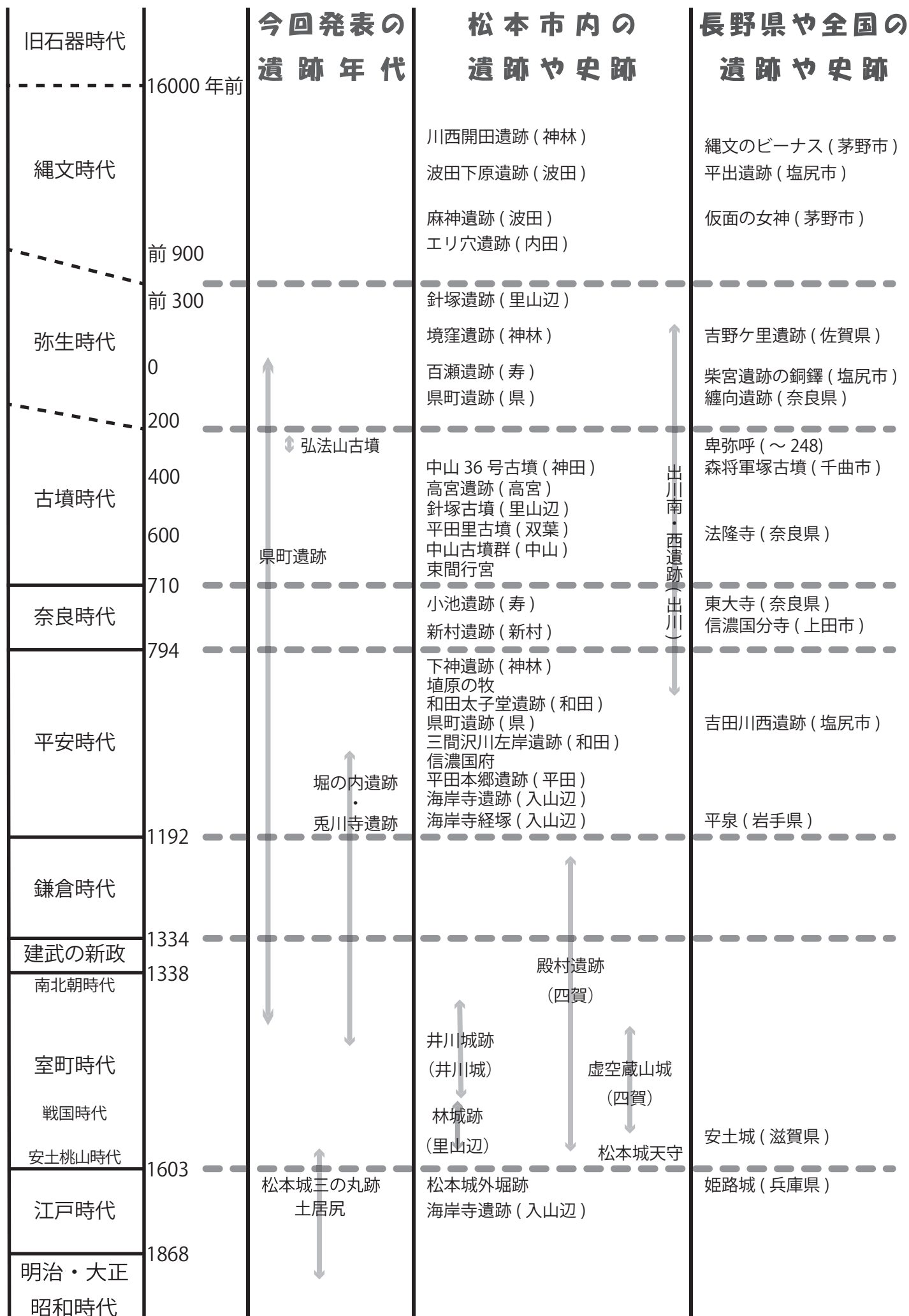
令和2年(2020年) 埋蔵文化財発掘調査・報告書刊行一覧表

令和3年2月1日現在

No.	遺跡・調査名	調査期間	調査面積	調査原因	時代	特徴・備考
1	アガタマチ 県町遺跡第20次	R1.8.26 ～R2.12.28	161m ²	雨水幹線新設事業	弥生時代～中世	集落跡
2	サン マルアト ヤナギマチ 松本城三の丸跡柳町第6次	R2.2.3 ～R2.7.10	446m ²	市庁舎建設事業	中世・近世・近現代	武家屋敷
3	ホリ ウチ トセンジ 堀の内遺跡第5次・兎川寺遺跡第2次	R2.5.11 ～R2.11.20	1,264m ²	公民館・市道建設事業	平安・中世	集落跡
4	アガタマチ 県町遺跡第21次	R2.5.15 ～R2.10.30	1,072m ²	県道拡幅事業	弥生時代～中世	集落跡
5	コウボウヤマコフン 史跡弘法山古墳第2次	R2.6.8 ～継続中	50m ²	史跡弘法山古墳再整備事業	古墳時代	古墳
6	サン マルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第12次	R2.6.16 ～R3.1.14	83m ²	都市計画道路(内環状北線)建設事業	近世・近代	武家屋敷
7	サン マルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第13次	R2.6.18 ～R2.11.10	137m ²	都市計画道路(内環状北線)建設事業	中世・近世・近現代	武家屋敷
8	キタモンアト 松本城北門跡確認調査	R2.10.26 ～R2.11.6	19m ²	市庁舎建設事業	近世	城郭
9	市内遺跡確認調査	通年	—	試掘・立会 (試掘詳細は次ページ)	各時代	試掘
10	イガワジョウシ 井川城址第3次 (整理作業、報告書刊行)	通年	—	保育園建設事業	中世	城館跡
11	ウエノ 上野遺跡第1次 (整理作業、報告書刊行)	通年	—	送電線鉄塔移設事業	縄文時代	集落跡
12	アガタマチ 県町遺跡第16・17次 (整理作業)	通年	—	保育園建設事業ほか	弥生時代・古代	集落跡
13	イデガワミナミ 出川南遺跡第17次ほか (整理作業)	通年	—	道路建設事業	弥生・古墳時代・ 古代・中世	集落跡
14	サン マルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第5次 (整理作業)	通年	—	松本城南・西外堀整備事業	平安時代・中世・ 近世	武家屋敷
15	サン マルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第9次 (整理作業)	通年	—	松本城南・西外堀整備事業	中世・近世	武家屋敷
16	サン マルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第11次 (整理作業)	通年	—	松本城南・西外堀整備事業	中世・近世	武家屋敷

開発工事等による市内遺跡試掘確認調査一覧(令和2年)

No.	事業者	所在地	原因事業	調査面積 (㎡)	遺跡との関係		遺構等の有無	検出遺構・遺物	備考	期間
1	民間会社	惣社	宅地造成	10.0	宮北	近接	なし			1月20日
2	個人	芳野	個人住宅	3.6	出川南	該当	なし			1月30日
3	学校法人	笹賀	学校増築	15.0	神戸	該当	なし			2月4日
4	国	波田	道路建設	103.6	未確認地域		あり	大型溝、方形土坑、中世整地層	本調査予定	2月17日～19日
5	民間会社	城山	集合住宅	7.8	放光寺	近接	なし			2月26日
6	個人	里山辺	個人住宅	4.0	北小松	該当	なし			2月26日
7	個人	庄内2丁目	施設	12.0	筑摩	該当	なし			3月2日
8	個人	島立	個人住宅	4.0	新村・島立条里的遺構、北栗遺跡	該当	あり	平安時代住居址	記録保存	3月2日
9	個人	島立	個人住宅	8.0	新村・島立条里的遺構、三の宮遺跡	該当	なし			3月16日
10	個人	大村	集合住宅	16.0	大村立石	該当	なし			3月18日
11	宗教法人	笹賀	本堂	6.0	神戸	該当	なし			3月19日
12	民間会社	寿中1丁目	宅地造成	14.4	百瀬	該当	なし			4月20、21日
13	長野県	岡田伊深	施設補強	10.0	北部古窯跡	該当	なし			5月1日
14	個人	筑摩1丁目	店舗	9.6	筑摩	該当	なし			5月21日
15	民間会社	波田	宅地造成	6.0	波田下島	近接	なし			5月21、22日
16	松本市	島立	市道改良	40.0	新村・島立条里的遺構、南栗	該当	なし			6月9、10日
17	個人	岡田下岡田	集合住宅	9.6	岡田堀ノ内	該当	あり	ピット、土坑	現状保存	7月1日
18	長野県	芳野	集合住宅	14.0	出川南	該当	あり	一部で古墳時代包含層	記録保存	7月9日
19	個人	桐3丁目	戸建賃貸住宅	8.0	トウコン原	該当	なし			7月21日
20	民間会社	南松本2丁目	宅地造成	19.2	出川西	近接	なし			8月7日
21	民間会社	岡田町	宅地造成	9.6	下出口	該当	あり	平安包含層、土坑	現状保存	8月19日
22	民間会社	岡田町	宅地造成	14.4	下出口・岡田西裏	該当	なし			8月19日
23	民間会社	寿豊丘	宅地造成	7.2	百瀬南	近接	なし			8月24日
24	民間会社	波田	宅地造成	24.0	見付久保	近接	なし			8月27日
25	長野県	会田	県道改良	9.0	本町下宿	該当	なし			9月1日
26	民間会社	岡田下岡田	太陽光発電施設	20.0	北部古窯跡	該当	なし			9月7日
27	民間会社	惣社	宅地造成	20.0	宮北	該当	なし			10月5日
28	民間会社	野溝木工1丁目	宅地造成	14.4	五輪	該当	なし			10月7日
29	民間会社	沢村2丁目	集合住宅	15.6	旧射的場西	該当	なし	包含層の可能性のある土層		11月4日
30	民間会社	双葉	工場建設	21.6	出川西	該当	なし	包含層の可能性のある土層		11月5日
31	民間会社	県1丁目	住宅	5.6	県町	該当	あり	縄文土器	現状保存	11月11日
32	長野県	中山	えん堤	9.0	御城山	近接	なし			12月1日
33	民間会社	島立	宅地造成	8.0	新村・島立条里的遺構、三の宮	該当	なし			12月11日
34	個人	和田	個人住宅	3.0	和田中	該当	なし			12月22日

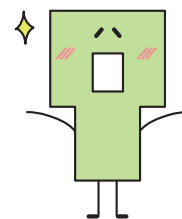


事例報告①

史跡弘法山古墳 第2次発掘調査 ～ 46年ぶりに3世紀のまつもとの王墓の墳丘を探る ～

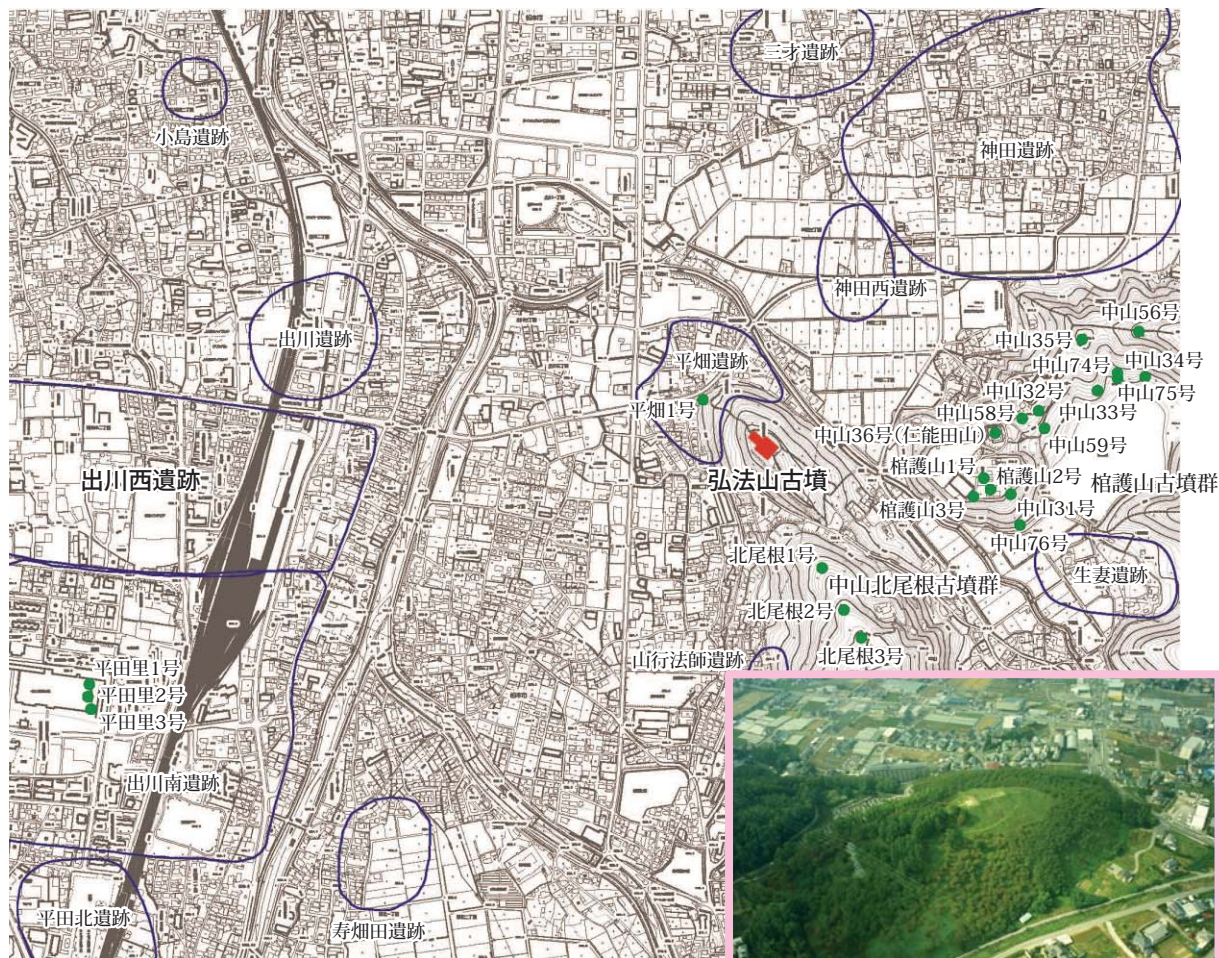
1 調査の概要

- (1) 遺跡の所在 松本市並柳2丁目、松本市神田2丁目
- (2) 調査の目的 史跡弘法山古墳再整備事業
- (3) 調査期間 令和2年6月8日～継続中
- (4) 調査面積 約50㎡



2 遺跡の概要

弘法山古墳は松本市東部にある中山丘陵の北端に立地する全長約66mの古墳です。丘陵の先端部に古墳があることは以前から知られていましたが、明治以降に畑地になっていたこと、第二次世界大戦の末期に高射機関銃が据えられていたことなどから、昭和49年に発掘調査が実施されるまで、大半が破壊されてしまった古墳であると認識されていました。発掘調査は学校の運動場建設に先立って実施され、調査の結果、弘法山古墳は東日本最古級にあたる3世紀末に築造された前方後方墳であることが判明しました。その後、昭和51年に国史跡に指定され、昭和57年には史跡公園として整備がされ、現在は桜の名所としても親しまれています。



古墳の位置

3 昭和 49 年の調査成果

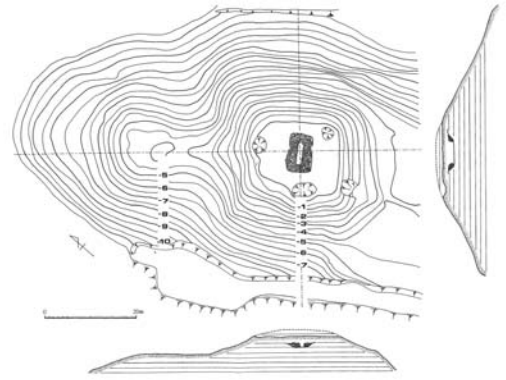
(1) 墳丘

【墳形】前方後方墳

【墳丘長】約 66m

【外表施設】石列を確認（葺石となるかは不明）
墳輪は未確認

【築造年代】3 世紀末



弘法山古墳 墳丘実測図

(2) 埋葬施設

埋葬施設は長さ 5.5m、幅 1.32m、深さ 0.93m の
竪穴式石室で、後方部の中央に主軸とほぼ直交するよ
うに位置しています。竪穴式石室を構築する石は河原
石が用いられており、これらは松本平に集まる複数の
河川から運搬されたと考えられます。石室内は黒土を
入れて固く締めており、天井石は確認されていません。



昭和 49 年の調査で確認した竪穴式石室

(3) 副葬品

【銅鏡】上方作系浮彫式獣帯鏡 1 面

【装身具】ガラス小玉（首飾り・手首飾り）738 点

【武器】鉄剣 3 点、銅鏃 1 点、鉄鏃 24 点

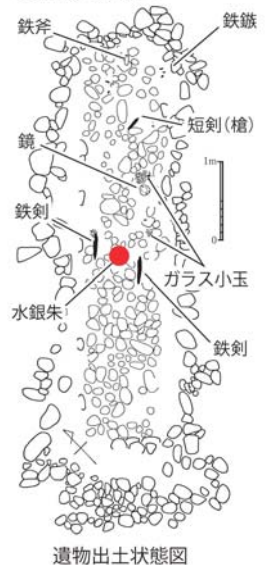
【工具】鉄斧 1 点、
鉋（木の表面を削って平らに仕上げるための工具）1 点



石室から出土した銅鏡

面径は 11.65 cm で、銘文に「上方作竟自有
□青□左白帟居右」とあり、青竜と白虎の 2
対が薄肉彫りで表現されています。銘文から、
中国の皇帝直属の工房で製作され、日本に伝
来した、舶載鏡であることが分かりました。

副葬品の配置



遺物出土状態図

(4) 出土土器

竪穴式石室の直上から、壺 10 点、高杯 10 点、器台 2 点、甕 2 点、手焙形土器 1 点
などの土器がまとまって出土しました。祭
祀などの目的で用いられた可能性が考えら
れます。これらの土器は東海地方の特徴を
有することから、被葬者は東海地方と深い
関わりがあった人物であったと推定されま
す。



弘法山古墳から出土した土器

いであににし
● 出川西遺跡 ●

出川西遺跡は、弘法山古墳から西に 1,200m の南松本駅北側一帯に広がる遺跡です。平成 25 年に実施した発掘調査では、古墳時代前期の竪穴住居の壁際から、土器 11 点が 1 ～ 2 列に並べ置かれた状態で出土しました。これらは、松本の特徴を持つ土器と、東海地方の特徴を持つ土器の 2 種類がみられました。このことから、出川西遺跡一帯は、弘法山古墳の被葬者が拠点とした集落であった可能性が推定されます。



出川西遺跡から出土した土器

4 史跡弘法山古墳再整備事業

(1) 弘法山古墳を理解するための課題

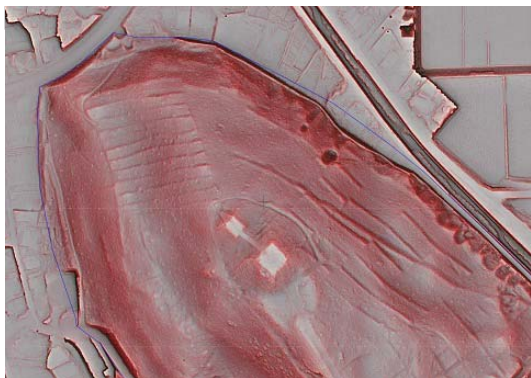
- ア 前は埋葬施設が中心となる限定的な調査であったため、墳丘の正確な形態や規模、葺石などの外表施設や周辺遺構（後方部以外の埋葬施設など）の有無などが判明していない
- イ 弘法山古墳と周辺にある古墳群や集落との関連が未解明
- ウ 弘法山古墳の整備から 40 年以上が経過したため、整備や活用の見直しが必要



発掘調査などによって弘法山古墳の新たな価値を発見し、その成果を整備や活用に活かして、弘法山古墳の魅力を伝えたい

(2) 整備に向けて実施している事業

- ア 赤色立体地図の作成：地形測量により弘法山古墳及び周辺の遺構分布を確認
- イ 関連古墳群調査：弘法山古墳に後続する周辺古墳群の調査（東海大学と協働で実施）
- ウ 弘法山古墳発掘調査：古墳の形態・規模などの確認



赤色立体地図（弘法山古墳周辺）

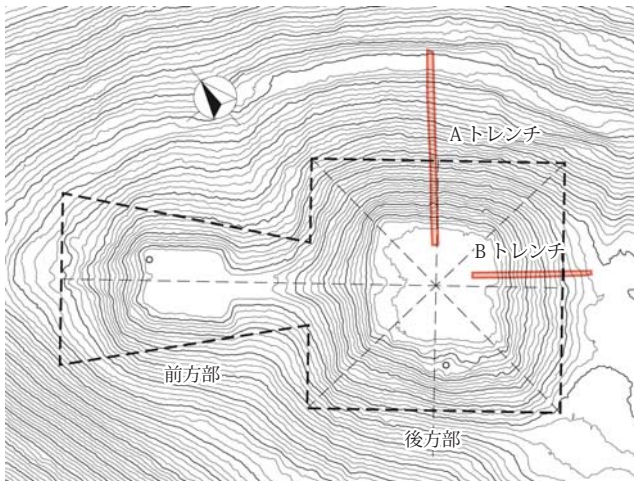


中山 56 号墳の測量

方眼紙に計測点を落とし、等高線や墳丘の形などを記入しています。

5 今年度の調査成果

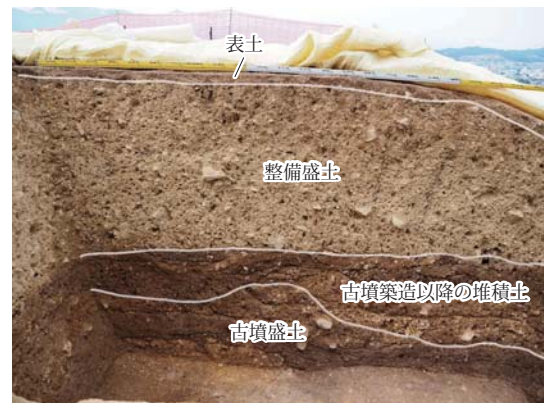
(1) 調査箇所



今年度は後方部の北東・南東の2カ所にトレンチ（古墳の性質を判断するために掘る溝）を設定し、調査を実施しました。調査では、墳丘の規模や外表施設・周辺遺構の有無の確認を目指しています。

(2) 盛土と出土遺物

古墳の盛土、古墳の築造後に堆積した土、史跡公園として整備をした際に古墳を保護するために盛った土などを確認しました。古墳の盛土は固く締まっており、丁寧に突き固めて古墳が造られたことが分かりました。



A トレンチ墳頂部

また、古墳の盛土の中からは弥生時代中期前半の土器の破片や黒曜石などが見つかりました。このことから、古墳は弥生時代の人々の集落の跡から土を運んで築造された可能性が考えられます。



盛土から出土した弥生土器
はじょうもん じょうこんもん
波状文や条痕文（貝で付けた平行な筋の文様）などの文様が見られる土器が出土しています。



盛土から出土した黒曜石



出土した石器

左：石鏃（黒曜石）

右：スクレイパー（チャート）

(3) 墳裾（古墳の端の部分）

裾部の調査から、弘法山古墳は地山^{じやま}（土地の基盤となる土層）を削って整形してから土を盛っていることが判明しました。この地点は後方部の中央から16～17mになることから、後方部の幅は32～34mになると予想されます。

A トレンチ裾部

地山が斜めに削られています。



(4) 集石

A・B トレンチともに、10～20 cm程度の石がまとまって確認された箇所がありました。この石は角礫だけでなく円礫も含まれていることから、河川から持ち込まれた可能性が考えられます。石の出土箇所は後世の溝や墳丘の外にあたり、葺石などの古墳に関わる石となるかは現段階で不明です。



A トレンチで確認した石

溝状の掘り込みの中に石が入っています。後世の土地利用の際の痕跡と考えられますが、用途は不明です。



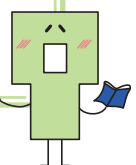
B トレンチで確認した石

墳丘の外側でまとまって石が確認されました。葺石が崩落したものの可能性が考えられますが、詳細は不明です。

6 まとめ

- (1) 古墳の規模を決定するための裾部は、後方部の2カ所で確認することができました。
- (2) 弘法山古墳は裾部の地山を削って整形した後に、土を突き固めて築造されていることが判明し、非常に丁寧な造りであることが分かりました。
- (3) 葺石の有無は今回の調査で明らかにすることはできませんでした。しかし、多量の石が確認されたことから、今後の調査が期待されます。
- (4) 今回の調査で、周辺遺構は確認されませんでした。

弘法山古墳は来年度以降も発掘調査を実施し、古墳の基本的なデータを集め、再整備に向けての準備を進めていきます



堀の内遺跡 第5次 兎川寺遺跡 第2次 発掘調査

—大形住居から見つかった謎の大石—

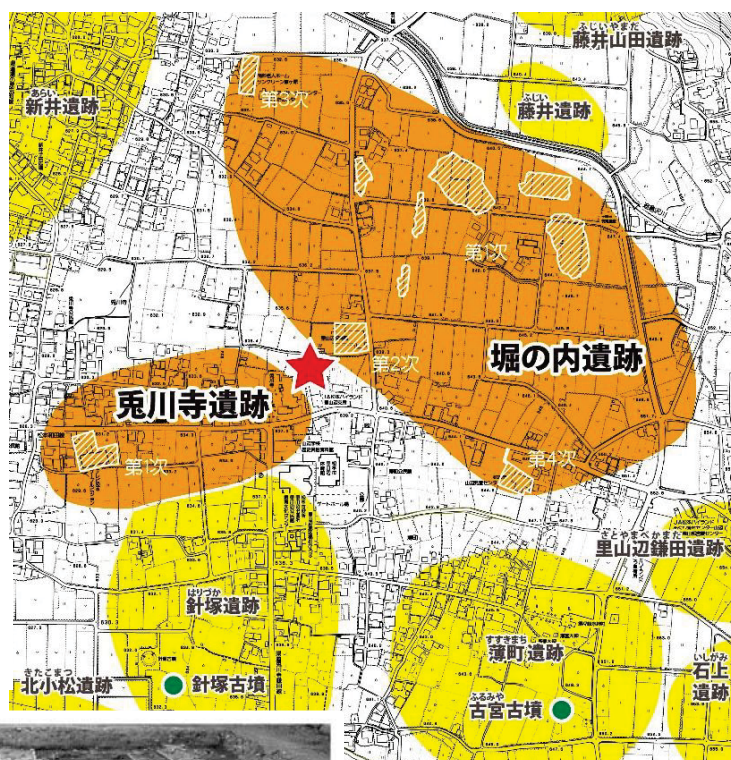
1 遺跡の概要

堀の内遺跡および兎川寺遺跡は、松本市東部の里山辺地区に位置し、薄川が形成する扇状地一帯には、多くの遺跡や古墳が密集しています。

過去の調査によると、堀の内遺跡は縄文時代～中世の集落遺跡であることがわかっています。時代ごとに集落の中心が少しずつ移動している様子から、近くを流れる川との関係によって生活の場を変えながら住居を建てていたと考えられます。兎川寺遺跡は平安時代を主とする集落遺跡で、遺構が高密度であること、多量の墨書土器や転用硯などの特殊な遺物が出土していることから、文字の読み書きができる人物が存在する周辺集落の中心地であった可能性があります。



▲ 川に破壊された住居址（堀の内第1次）
古墳時代以前の集落に川が流れ込んだため、集落は西へと移動しました。



▲ 周辺地図（★が今回の調査地）



◀ 重複する遺構（堀の内第2次）
里山辺保育園の建て替えに伴って発掘され、奈良時代～中世の遺構から大量の遺物が取上げられました。



▲ 今回の発掘調査の一コマ（礫のない箇所が住居址）

洪水によって流されたと思われる大小の礫が全面に広がり、調査も一苦労……。昔の人々は砂礫層を掘って住居を建てていたため、礫の切れ目が遺構を探す手掛かりとなりました。

2 調査の概要

- (1) 遺跡の所在：松本市里山辺兎川寺 2941-1
- (2) 原因事業：里山辺公民館建設工事および市道 2736 号線拡幅工事に伴う発掘調査
- (3) 調査期間：令和 2 年 5 月～11 月
- (4) 調査面積：のべ 約 1,264 m²（公民館建設予定地は 2 面）
- (5) 主な遺構：[平安時代] 大形住居址 / 住居址内に据えられた大石と鍛冶炉
[中世] 柱穴列（掘立柱建物址か） / 集石土坑
- (6) 主な遺物：[平安時代] 緑釉陶器 / 銅製鉸具 / 鉄鏃
[中世] 青磁 / 中世陶器（常滑焼）

3 中世の遺構群

中世の生活面からは、大きな方形の穴が複数見つかりました。遺構どうしの切り合いによって正確な大きさは分かりませんが、およそ 2～3m 四方で、建物の一部として利用された可能性があります。また、調査区の南東には 100 を超える無数の穴が掘られており、中には礎石や柱の痕が残るものもありました。おそらく掘立柱建物が建てられていたのでしょう。



▲ 左：青磁（碗） / 右：常滑焼（甕）

中世の生活面や柱穴の中から、当時の陶磁器が出土しました。青磁の碗はいずれも「鎚蓮井文（ツギレンバイ）」をあしらっています。



▲ 東西に延びる柱穴列（中世）

無数にある穴の中には直線に並ぶものもあり、掘立柱建物があったことが予想されます。

4 平安時代の大形住居

(1) 礎石建ちの大形住居

今回の調査では 2 番目に大きな、約 6.3mの大形住居址です。径 40cm前後の扁平な石が床面に整然と並ぶ様子から、礎石建ちの建物であったことがわかります。礎石の中には、上面に柱の痕が残るものもありました。中央には鍛冶炉と思われる焼土がみられ、近くには金床石が 2 つ置かれていました。集落の鍛冶屋が営まれていたことが想像できます。

住居の壁際からは伏せた状態で並べた土師器と、2 つの土師器を合わせ口にして重ねたものが出土しました。おそらく、引っ越しの際に置いたものと思われ、住居廃絶に伴う儀礼行為があったのかもしれません。



▲ 壁際に置かれた土師器

伏せたもの（写真上）と、2 つの土師器を合わせ口にしたもの（下）がありました。



◀ 暗文黒色土器（小椀）

内面にタールが付着しているため、火を焚いたのかもしれません。

▶ 金床石

熱した金属を叩いて加工する際の作業台として使われました。石の表面は高温により赤くなり、叩いた痕跡が残ります。



◀ 住居から出た大量の礫

一人では持ち上げられないほど大きな礫もたくさんありました。

礎石建ちの大形住居 ▼

扁平な石が整然と並んでいることから、住居を支える礎石であったことがわかります。





▲ 今回の発掘調査の一コマ

(2) 大形住居内の謎の大石

調査区外へと延びる大形の住居址です。壁際には壁柱穴が掘られ、中央には火を焚いたと思われる環状の石列があります。床面には炭が散らばり、被熱した石の隙間からは 11 世紀中頃にだけみられる土師器の皿が覗いていました。

この住居で注目すべきポイントは、北東角の大きな石(写真右の▼)です。幅 60 cm 弱、高さ 40 cm ほどの、頂点を上にもつ三角錐の大石で、周りは径 20 cm ほどの石で囲まれています。



住居の壁に掘られた柱穴 ▲

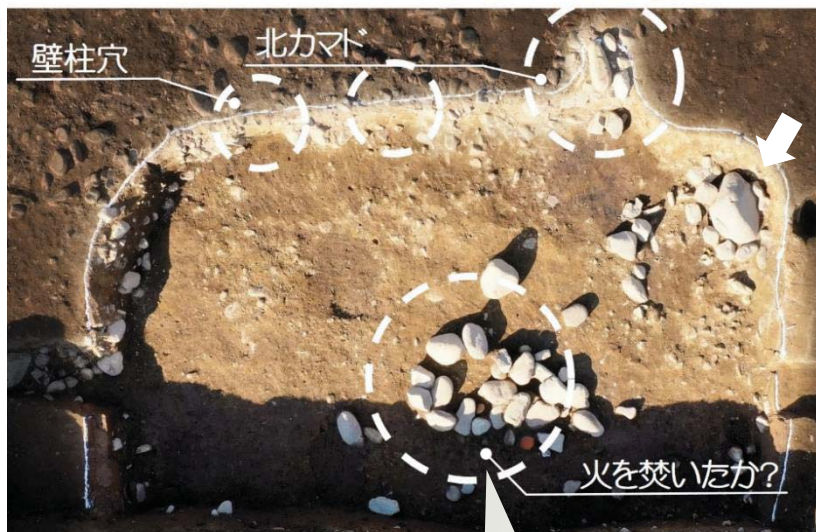
砂礫層の中に住居が建てられているため、壁柱穴内の土には礫が混ざっていません。

大形住居 ▶

壁柱穴の他に、中央の環状石列を方形に囲む柱穴も検出されました。径 70 cm ほど、深さ 30 cm 以上のしっかりとした穴で、住居を支える主柱があったと思われます。



▲ 緑釉陶器(皿)



銅製鉸具(一部) ▶

律令官人が制服の腰に着けていたもので、ベルトを留める「バックル」にあたります。銅で造られ、使用当時は黒漆が塗られていたと思われます。兎川寺第 1 次の調査地には文字の書ける人物がいたことがわかっており、今回の調査地からも特殊な遺物が出土したため、里山辺周辺には有力な人物がいた可能性があります。



土師器(皿) ▲

高台のない扁平な皿で、口縁は面取りをするように折り返しています。形態の共通から、平安京出土資料との関連が指摘されますが、後の中世にはカワラケへと移り変わったとみられます。

大石の下には土師器の杯や盤などが埋められていたことから、人為的に設置されたものであることがわかりました。当時の人々は、なぜ大きな石を住居の中に据えたのでしょうか…。

推論 1 石や大きな岩に神様や霊などの信仰対象を憑依させて祀る「磐座(イワウ)」

推論 2 石自体を神聖なものとして信仰する「石神」

住居自体が、神社やお寺のような信仰の場、屋内祭祀の空間として利用されていたのでしょうか。あるいは、祭祀にまつわる確定的な遺物は見受けられないため、信仰とは全く関係のない別の設置目的があったのかもしれない。



◀ 住居内の大石

真上から撮影した写真で、「X」が三角錐状の大石の頂点になります。尖りを上に持ったため、大石の上には物は置けそうにありません。



大石の直下から出土した土器 ▶

大石の下には土師器の杯や盤、黒色土器など複数の土器が埋められていました。

住居は調査区外へと続いていたため、今回の調査では全貌は明らかとなりませんでした。これほどの大きな石を屋内に設置する行為は珍しいと思われます。この住居の中で平安時代の里山辺の人々は何を行っていたのでしょうか……。深まる謎を解明するには、全国の類例と比較しながら検討する必要がありそうです。



▲ 今回の発掘調査の一コマ

周りの石を外すと、下に隠れた土器が少しずつ顔を出し始めました。大石は力自慢の男性5人でも、持ち上げるのがやっとでした。当時の人も、大石の設置には苦勞したことでしょう…。

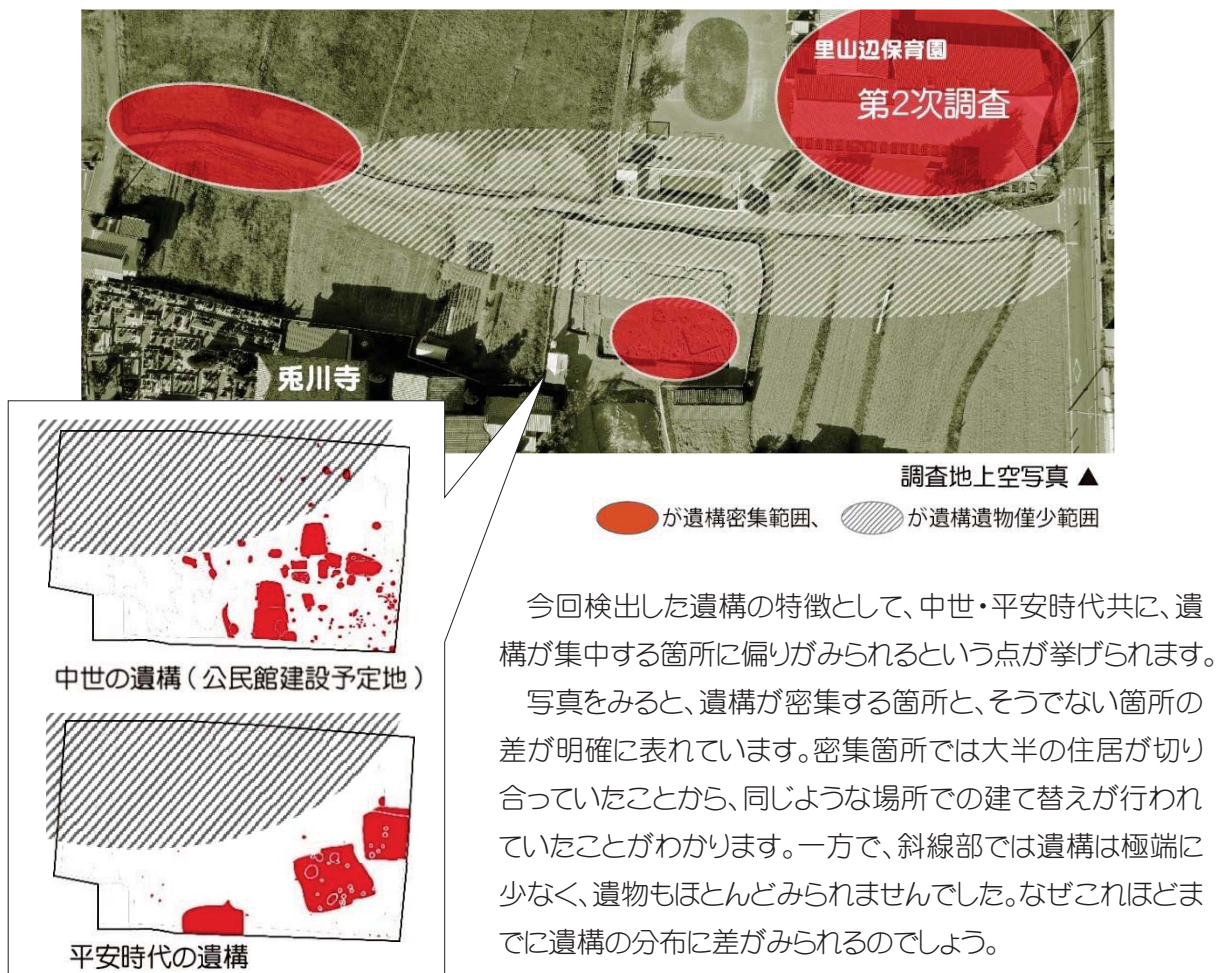
5 考察

(1) 砂礫層に囲まれた集落

ア 川が運んだ大量の砂礫

調査地の南を流れる薄川は絶えず流路変更や氾濫を繰り返しており、今回の調査地でも厚さ1mを超える洪水性の砂礫の堆積を確認しました。径 50 cmを超える巨礫を含む土砂混じりの砂礫層が、一帯を覆っているにもかかわらず、なぜ昔の人々はこの地を生活の場として選んだのでしょうか。

イ 密集する遺構



ウ 自然環境との共存

推論 1 住居などの建設にかかる労力を抑えるため？

住居を建てるためには、大小の礫が詰まった調査地の土を掘り下げる必要があり、相当の労力を必要とします。地中から掘り出した大量の礫の処分には昔の人々も困ったことでしょう。新しい住居を建てるために、別の場所をまたゼロから掘り始めるよりは、同じ場所に住居を建てようとする方が自然です。



▲ 大量の礫

次から次へと出てくる礫の置き場に頭を悩まされました。



▲ 市道拡幅部でのトレンチ調査

幅の狭いトレンチ調査ながら、西半部では何軒もの大形住居が重なり合っている様子を捉えることができました。

推論 2 遺構遺物僅少範囲には自然の川が流れていた？

今回の調査地と第2次調査地との間に通る市道沿いには、農業用水路が西流しています。市道に沿ってトレンチを入れたところ、表土直下より径40cm前後の石を並べた全長5mほどの近代以降の水路跡が見つかり、さらに下の層からは平安時代以降のものと思われる川の跡を複数箇所を確認しました。

現在の水路の前身であった川が、平安時代～中世にあった集落と集落の境界としての役割を果たしていたために、遺構遺物の存在が極端に少ないのかもしれません。



調査地上空写真 ▲

● 集落推定範囲、|||||| 自然流路、■ 近代以降水路石組、← 現在の水路

(2) 平安時代後半の特殊な集落…??

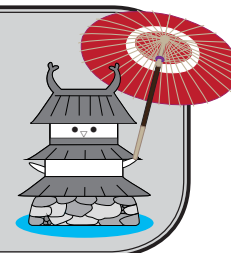
平安時代の生活面からは、10～11世紀を中心とする平安時代後半の遺物が多量に出土し、ほとんどが住居に伴っていました。住居はいずれも規模が大きく、北側にカマドをもつものが大半を占めるという、松本平では珍しい特徴が挙げられます。また、礎石建ちの住居や、鍛冶炉や謎の大石が置かれるなど、通常ではみられないような特殊な屋内施設も確認されました。



今回の調査地は平安時代後半の里山辺地域において、特別な役割を担っていた集落であった、あるいは特別な人物がいた可能性があり、周辺集落の在り方を探る上で、ひとつの大きな足掛かりとなるでしょう。

松本城三の丸跡土居尻第13次調査

修理を繰り返し、大切に使われ続けた「水の道」



1 調査の概要

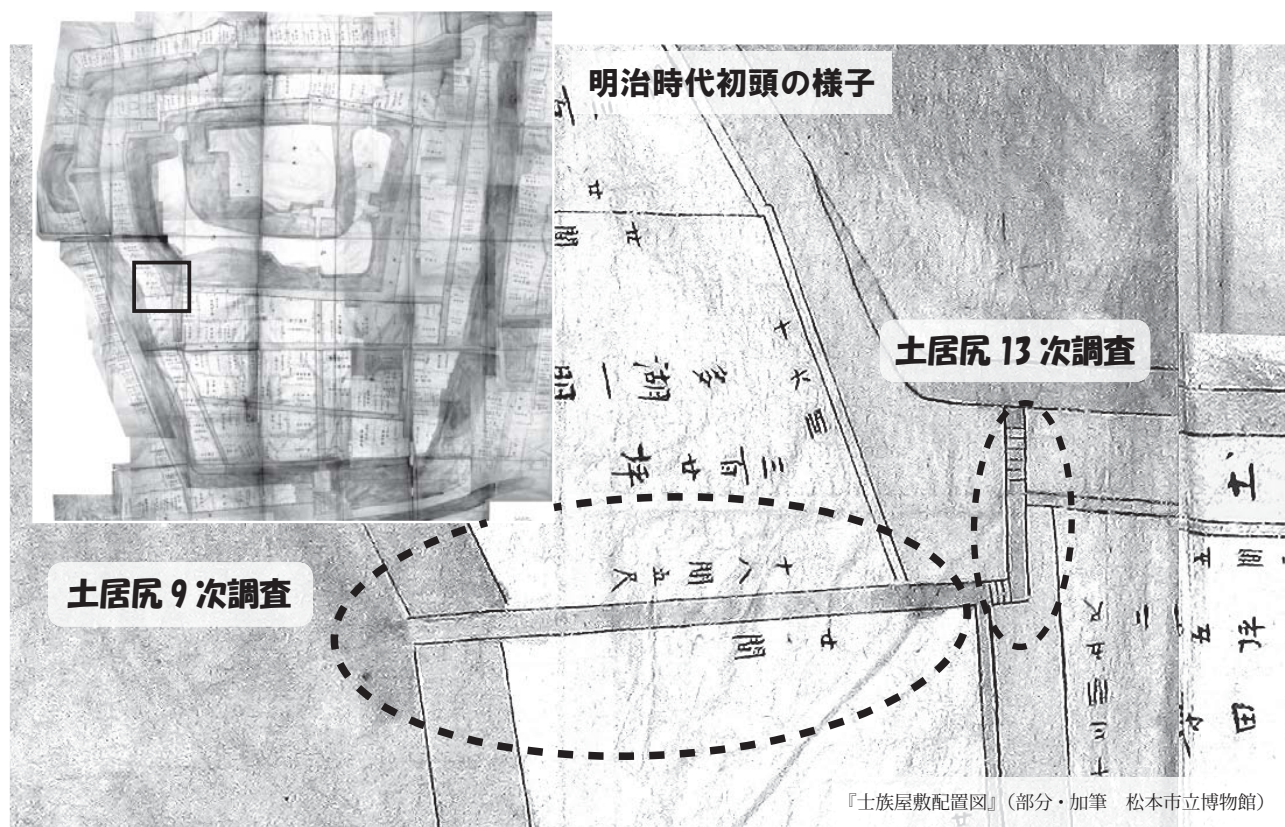
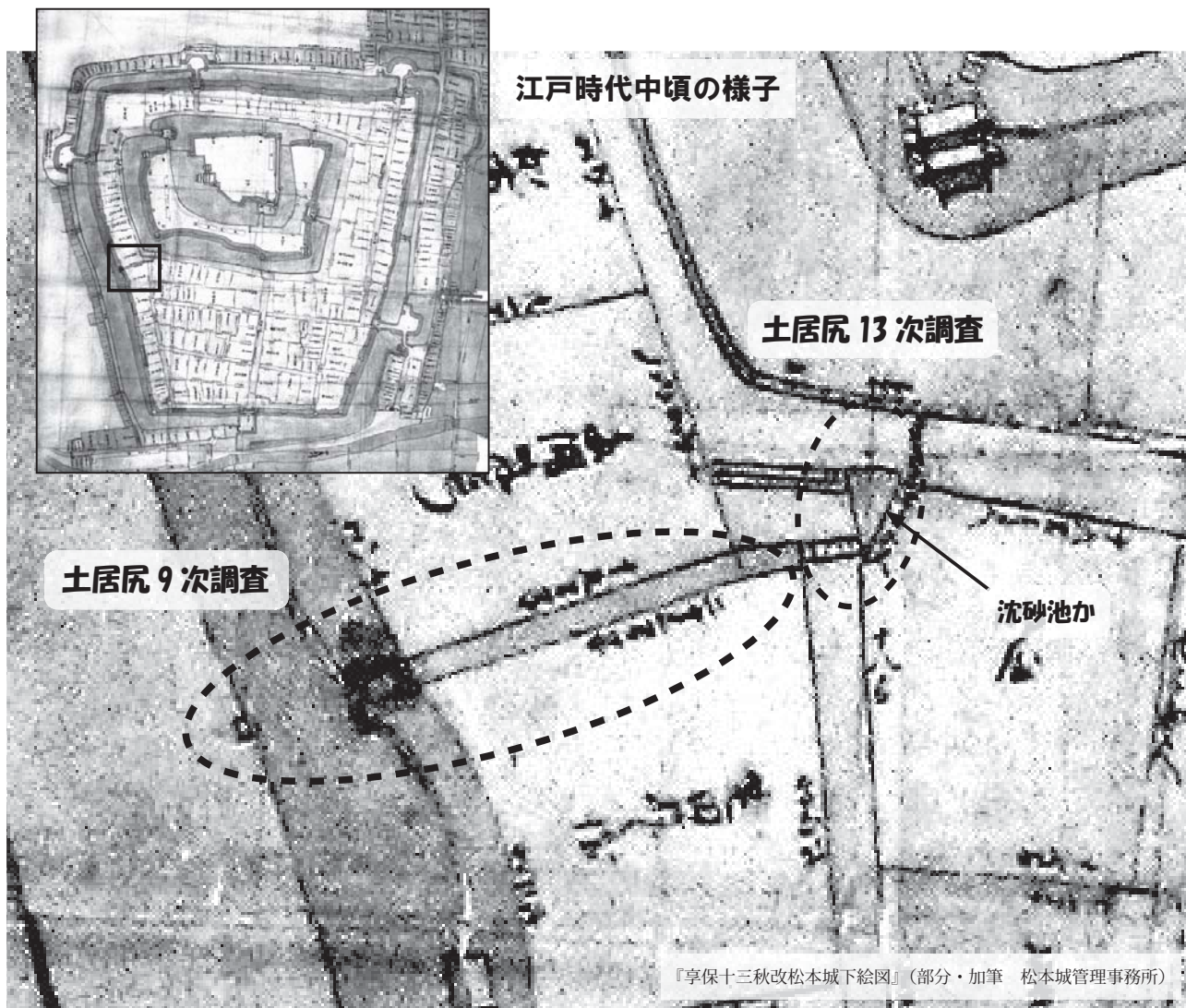
- (1) 遺跡の所在：松本市大手 2～3 丁目（二の丸交差点内）
- (2) 調査原因：内環状北線整備事業
- (3) 調査期間：令和2年6月18日～11月10日
- (4) 調査面積：約 136.7 m²
- (5) 主な遺構：石組水路跡、地境跡
- (6) 主な遺物：陶磁器（美濃焼の茶道具や雑器、肥前焼の食器など）
土器（灯明皿、内耳鍋など）、瓦（家紋瓦、鯨瓦）、その他（銅銭、煙管など）



2 調査地点について

江戸時代の絵図で確認すると、今回の調査地に水路が通っており、その途中の三角状の沈砂池（水の流れを遅くすることで、砂を沈めて取り除くための池）と考えられる場所です。水路は、外堀の水を総堀へと流し、外堀の水位を調節する大事な機能があります。

平成 28～30 年度に行われた発掘調査（土居尻 9 次調査）では、水路の西側部分を確認できました。本調査は、水路の東側部分にあたり、土居尻 9 次調査と外堀の間に位置します。



3 文書・絵図からわかる水路の変遷

(1) 『信府統記』(享保十年編纂)

- ・ 「…同(天正)十五年丁亥マデニ、…三ノ曲輪縄張シテ、塹ヲホリ土手を築キ…」
→ 小笠原貞慶が三の丸に堀と土手を整備したことがわかります。
- ・ 「…父康昌(数正)ノ企テル城普請ヲ継、天守ヲ建、惣堀ヲサラヘ、幅ヲ広クシ、岸ノ高クシテ石垣ヲ築キ…」
→ 石川数正の意思を継いだ康長は、天守を建て、総堀を深くし、土塁を築いたことがわかります。

➡ **水路は、その用途から外堀・総堀と同時期に造られていると考えられます。**

(2) 近代

松本城は、明治維新を迎え、天守を残して楼門や門、塀等が破却されました。南・西外堀は大正8年頃から昭和初年にかけて大部分が埋め立てられ、宅地化されました。

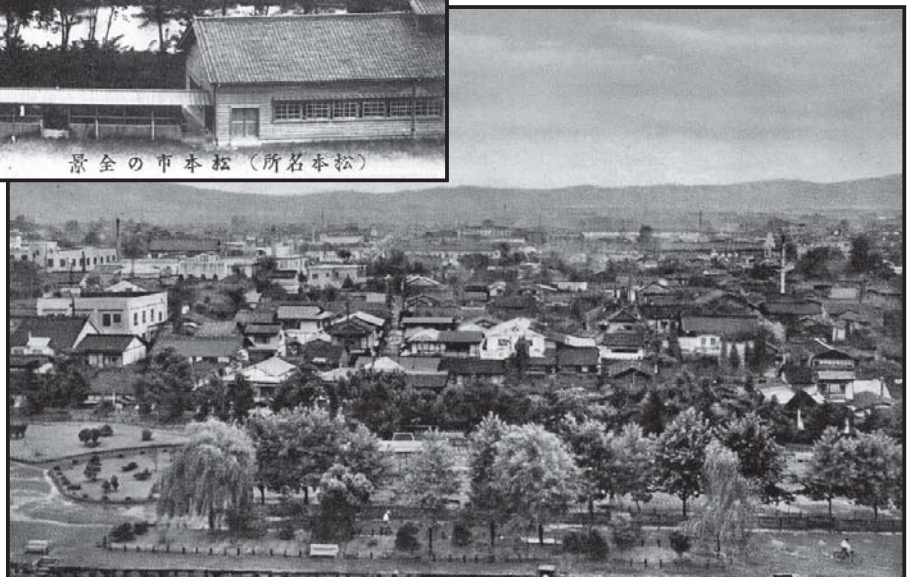
➡ **大正8年頃には、水路が本来の用途をなくしたと推定でき、この時に、水路も埋め戻された可能性があります。**

『信州松本絵葉書集成』(2009 書肆 秋櫻舎)



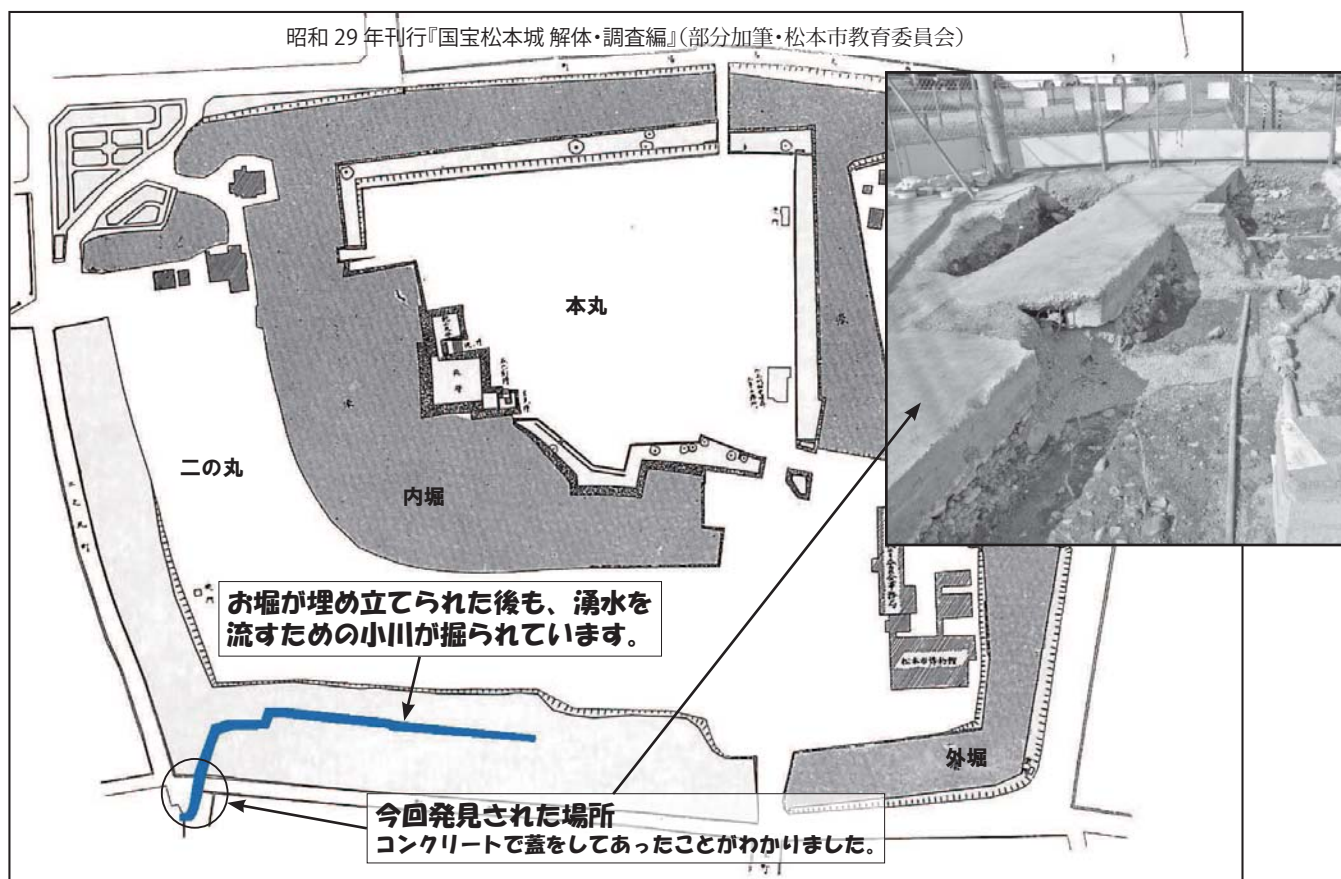
明治39年撮影(天守から南を望む)
手前に南外堀の水面が見えます

昭和30年頃撮影(天守から南を望む)
堀が埋め戻され、宅地化しています



4 調査成果

- (1) 第9次調査の成果と合せて、水路の全体像が把握できました。
 - 外堀付近から総堀まで、水路跡を確認することができました（次頁写真1・8・9）。
- (2) 水路の改修が度々行われたことがわかりました。
 - 近世の石列から近代以降の石列が確認できました（次頁写真2～4）。
- (3) 沈砂池は確認できませんでした。
 - 水路西側の石組みは残存しておらず、近代以降の土が深くまで堆積していました。
 - 弘化2年（1845）2～4月に北・西外堀の浚渫を行い、土居尻や西堀に泥水を落としながら浚ったという記録が残っています（昭和8年刊行「松本市史上」より）。
 - 土居尻9次調査で、土塁を修復した箇所があります（浚渫時に崩した可能性）。
 - 沈砂池部分を壊し、浚渫用の溝を掘った可能性があります。
- (4) 南・西外堀が埋められた跡も水路が存在しました。
 - 調査区の真ん中に延びるコンクリート製の水路と考えられる構造物が見つかり、地元の方の証言や古い地図から、外堀を埋め立てた後にも湧き水を処理するために水路が使われていたことがわかりました（下図）。



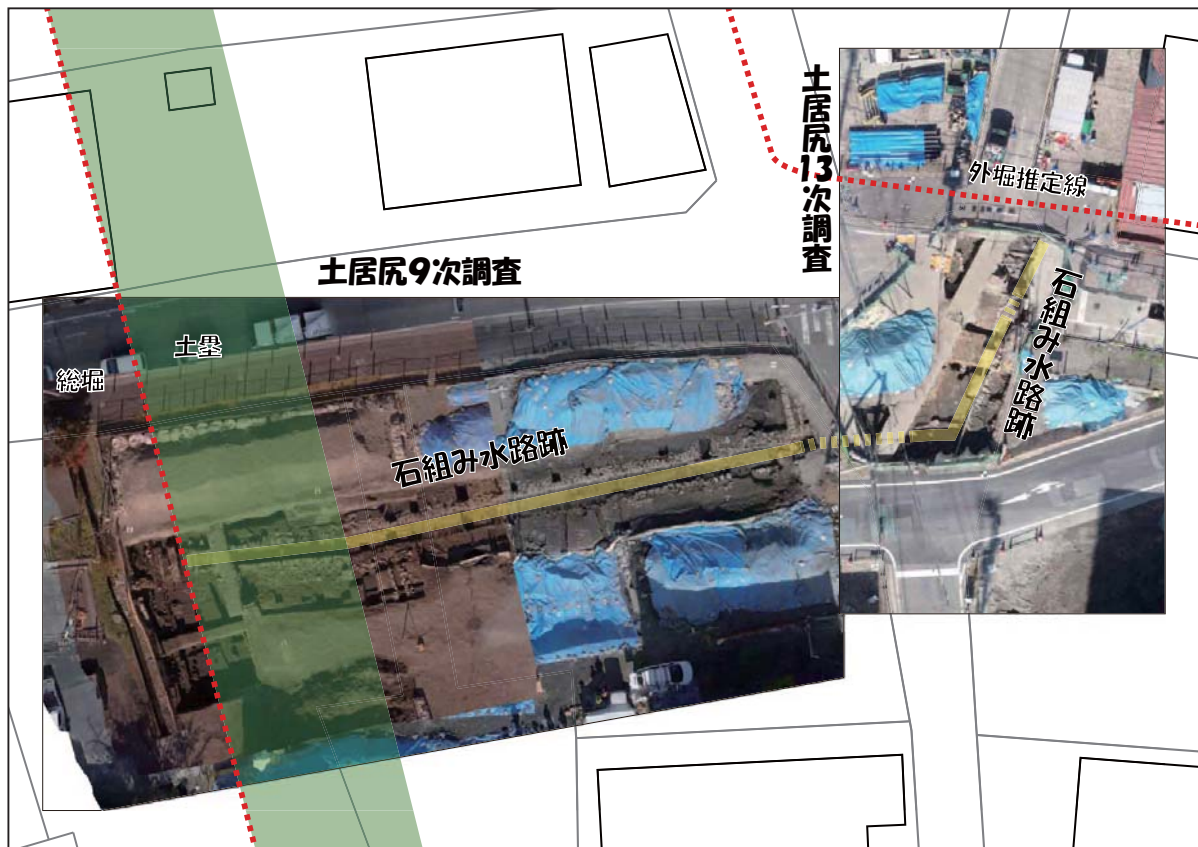


写真1 本調査と土居尻9次調査の成果



写真2 見つかった石組み水路跡



写真3 高さ・軸が違うことがわかる(4段目は緑色のガス管下から見つかりました。)

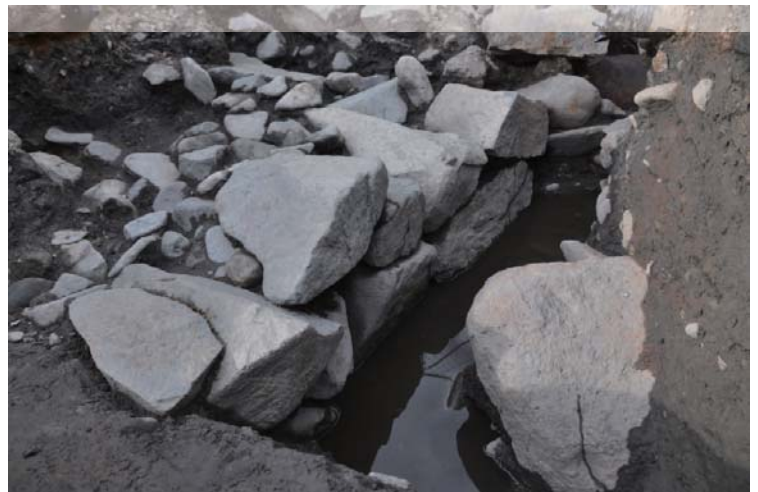


写真4 調査区北端で見つかった江戸時代の石組み水路跡



写真5 現代の管路の間に残った石組み水路跡



写真6 水路跡の東側（武家屋敷地）で見つかった桐紋がある瓦



写真7 泥にパックされて、きれいな状態で出土した寛永通宝



写真8 土居尻9次調査で見つかった石組水路跡（東から）



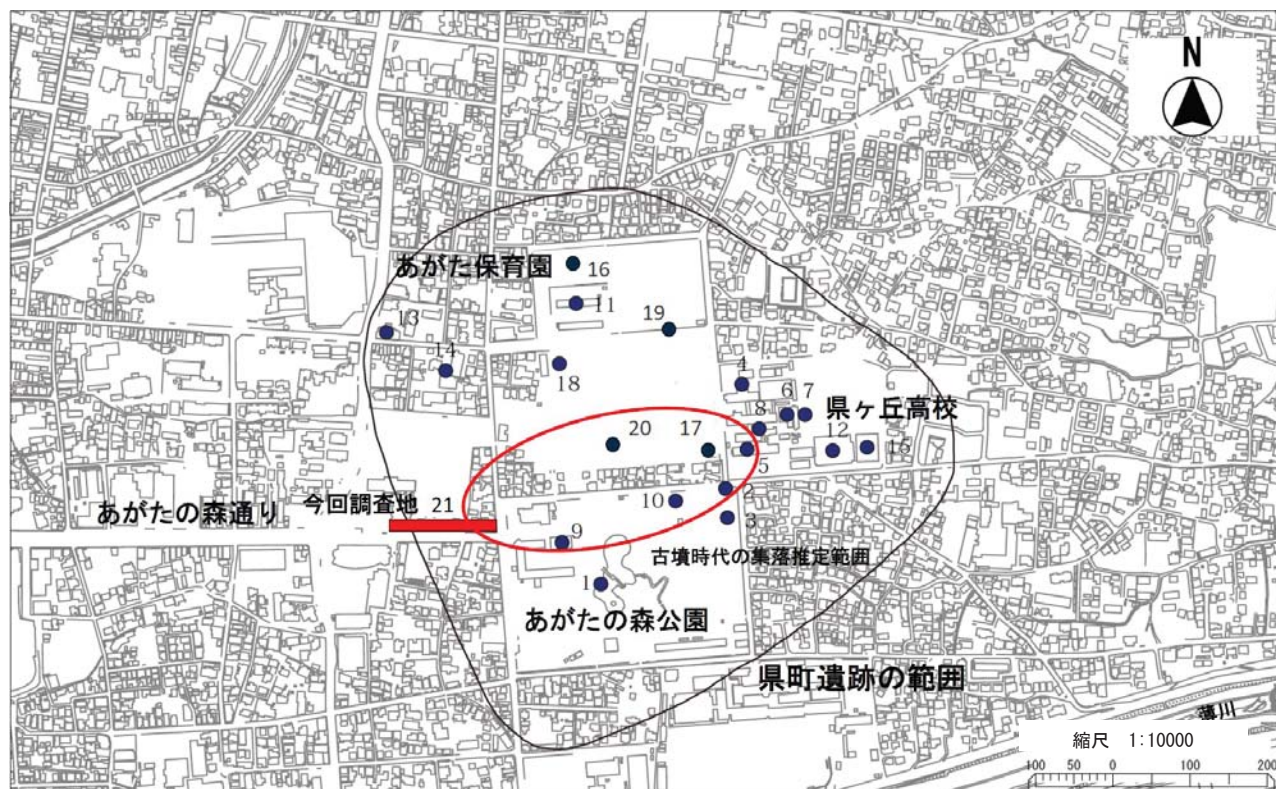
写真9 水路の排出口の様子（土居尻9次調査）

県町遺跡 第21次発掘調査

～古墳時代の集落跡を発見！～

1 遺跡の概要

県町遺跡は、薄川の北に広がる、弥生～平安時代にかけて栄えた大規模集落です。遺跡一帯は本遺跡を中心に特殊な遺物が出し、信濃国府推定地の一つに挙げられています。地形的には薄川扇状地の扇端にあたります。



2 これまでの調査成果

(1) 弥生時代

- ア 遺構 竪穴住居址 (51)、掘立柱建物址、土坑・墓 (土器棺墓、礫床木棺墓、木炭棺など) 多数他
- イ 遺物 弥生土器、石器・石製品 (指輪状石製品・勾玉・管玉など) 他

(2) 古墳時代

- ア 遺構 竪穴住居址 (9)・土坑多数他
- イ 遺物 土師器、須恵器、石器・石製品、金属製品他

(3) 平安時代

- ア 遺構 竪穴住居址 (180以上)・掘立柱建物址 (5×4間の大型建物等) 他
- イ 遺物 土師器、須恵器、陶器 (緑釉陶器・緑彩文陶・緑釉三足盤 など)、磁器、石器・石製品 (帯飾など)、金属製品 (帯飾など)、銭貨 (皇朝十二銭一 隆平永宝 など) 他

(4) 鎌倉～安土桃山時代

- ア 遺構 竪穴状遺構、土坑他
- イ 遺構 陶器、磁器、石器・石製品、金属製品、銭貨他

3 調査の概要

- (1) 遺跡の所在 松本市県 1 丁目1535-1
- (2) 原因事業 県道松本塩尻線（あがたの森通り）拡幅事業
- (3) 調査期間 令和 2 年 5 月 8 日～10月31日
- (4) 調査面積 約1,070m²
- (5) 遺構
 - ア 弥生時代 竪穴住居址 2、土坑 1、溝 1
 - イ 古墳時代 竪穴住居址 2、溝 1
 - ウ 平安時代 竪穴住居址 2、土坑 2
 - エ 鎌倉～安土桃山時代 竪穴状遺構 1
- (6) 遺物
 - ア 弥生時代 弥生土器（甕・壺・鉢他）、石器（磨製石鏃・磨製石斧他）
 - イ 古墳時代 土師器（高坏・甕・甑・壺・小型丸底土器他）、土製品（土錘）
 - ウ 平安時代 土師器（杯・碗他）、緑釉陶器（皿・碗他）、灰釉陶器（皿・碗他）、鉄製品（刀子他）
 - エ 鎌倉～安土桃山時代 銭貨（げんゆうつつほう元祐通宝-北宋銭）

遺構配置模式図



- 弥生時代
- 古墳時代
- 平安時代
- 鎌倉～安土桃山時代

A 区

- ・ 大規模な氾濫が弥生～古墳時代に発生し、地面が流失
- ・ 氾濫の堆積土上に古墳～平安時代の生活面が形成

B 区

- ・ 大規模な氾濫を受けず、各時代の遺構を確認
- ・ 遺構密度は、比較的高い

4 遺構・遺物

(1) 弥生時代

2軒の竪穴住居址、1基の土坑を確認しました。
の鉢などが出土しました。

竪穴住居はいずれも中期で、赤彩土器



竪穴住居跡（完掘状況）



土坑（遺物出土状況）

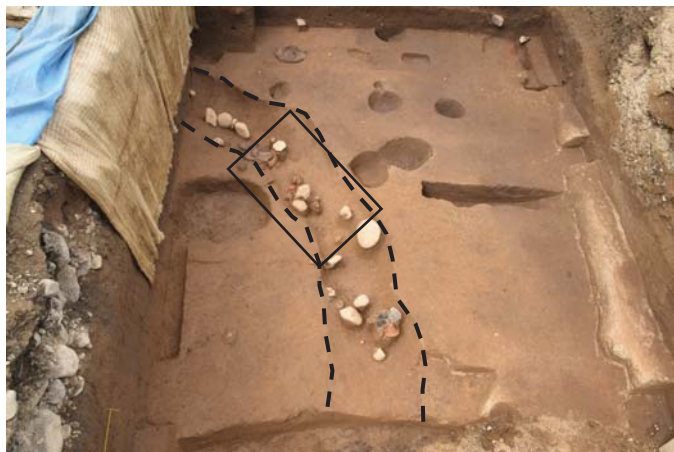
(2) 古墳時代

遺構は中期の竪穴住居址と溝です。

溝跡から意図的に置かれたと考えられる高杯、小型丸底土器、甕などが出土しました。



写真上 竪穴住居址（完掘状況）
写真左 同上（甕出土状況）



写真上 溝（遺物出土状況）
写真下 上の口の拡大 高杯と小型丸底土器

東海系土器の出土

薄川の氾濫跡の堆積層から、弘法山古墳が築造された3世紀末の東海系の土器が見つかりました。この壺の破片は、器面が摩滅していないことから、薄川の氾濫によって比較的近くから流れてきたものと考えられます。本遺跡の上流には弘法山古墳に関わる集落があったのでしょうか。



壺の口縁部破片（外面）



同左（内面）

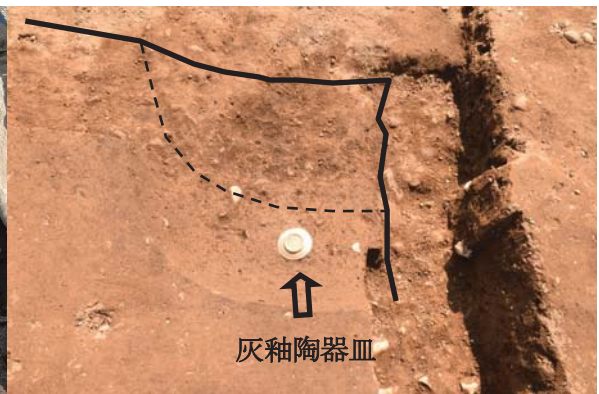
(3) 平安時代

調査地の西側は、土坑1基のみの確認で、集落の端部の様相を呈しています。調査地東端部では竪穴住居2軒と土坑1基を確認しました。そのうち1軒の竪穴住居址では鍛冶炉を確認しました。

遺物はほとんどが竪穴住居址の出土品で、一般的な食器・煮炊具の土師器の坏・灰釉陶器の皿、土師器の甕や高級な緑釉陶器の碗があります。



竪穴住居跡（完掘状況）



土坑（遺物出土状況）

竪穴住居の概要

規模・平面形 410×390×36cm・方形か

カマド 粘土カマド

(4) 鎌倉～安土桃山時代

竪穴状遺構 1 基のみを確認しました。区域外に延びるため全体の形状・規模は不明ですが、幅2.1mの半地下式の建物と思われます。床面には、柱を支えた6個の礎石が確認され、その間隔は90cm程です。

げんゆうつうほう

遺物は、床面近くから出土した元祐通宝（北宋銭）のみです。



竪穴状遺構（完掘状況）



写真上

参考：栃木県宇都宮市飛山城復元建物

5 まとめ

(1) 古墳時代の集落など

ア 中期の集落

竪穴住居址 2 軒と溝 1 条を確認しました。これまでの調査成果とあわせると、この時期の集落は現在の県ヶ丘高校の南西部からあがたの森交差点付近一帯に広がっていたと考えられます。

イ 中期の溝跡

溝には、高坏や小型丸底土器等が意図的に置かれていました。形状、規模、遺物の出土状況から、古墳の周溝の可能性がります。

ウ 東海系土器片の出土

これによって、弘法山古墳築造期の集落が周辺に存在していた可能性が高まりました。

(2) 遺跡西端部の様相

ア 調査地西側を流れた弥生～古墳時代の薄川の氾濫により遺構が流失した可能性があるものの、その後の奈良～平安時代の遺構分布状況は、調査地東端部を除き竪穴住居址は皆無で、少数の土坑等に限られます。このような状況は、集落の西端部の様相を示しています。

(3) 弥生・古墳・平安時代の集落

ア 遺跡の西端部にあたる調査地一帯は、地理的には扇状地の扇端にあたり、弥生時代、古墳時代、平安時代に集落域として開発されていたことがわかりました。調査地の西は広大な湧水地帯で、水稻耕作などの生産域と考えられます。人々は水田を眼下に望む微高地に居住していたのでしょう。

イ 薄川の氾濫の痕跡は、これまでも多くの調査地点で確認されています。竪穴住居址などとの新旧関係等から、各時代を通じて何度も洪水が発生したことがわかりました。場合によっては集落が流されたことも想像できます。そのような環境下でありながら、集落が営まれていました。